

目次

まえがき

- 卷之三

卷一 文本



卷二

- |        |           |
|--------|-----------|
| 曰福渡し   | 曰こんくわい    |
| 曰苞山伏   | 曰さやまふく    |
| 四伯母が酒  | よのしゆがさけ   |
| 因二千石   | いんにせんごく   |
| 因恶坊    | いんあくぼう    |
| 田内沙汰   | たうちさた     |
| 八胸突き   | はちきょうつき   |
| 囚茶壺    | きゅうぢゃく    |
| 田生捕り鈴木 | たうみとらひすずき |

## 卷三

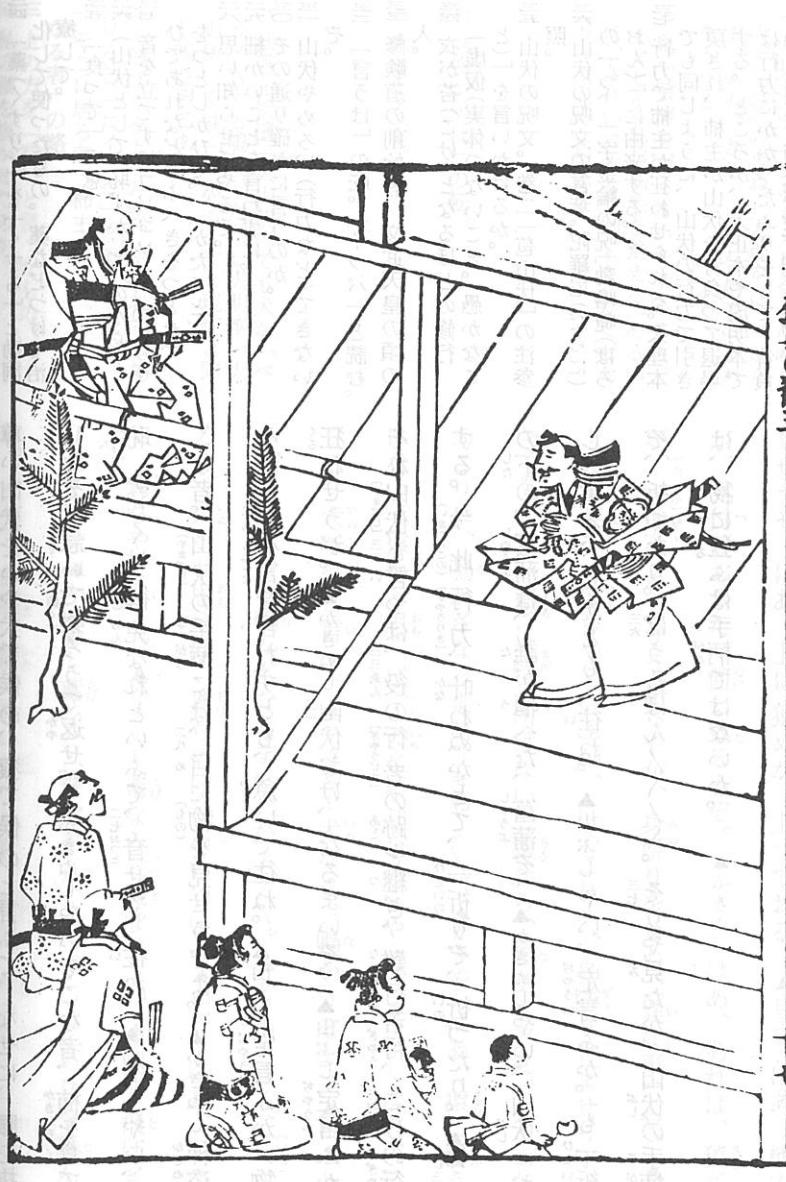
□末広がり	一〇
□かくすい	一一
△鈍根草	一二
四法師物狂い	一二
国柿山伏	一二
因薩摩守	一二
田太刀奪い	一二
囚どぶかつちり	一二
囚八句連歌	一二
田仏師	一二
卷二	一一
卷三	一一
卷四	一一
□相合榜	一一
□粟田口	一一
卷五	一一
△那須の与一	一〇〇
四釣り女	一〇〇
五笠の下	一〇〇
囚婢	一〇〇
田文山賊	一〇〇
囚ふねふな	一〇〇
囚柿売り	一〇〇
田二人大名	一〇〇
卷六	一一
△羯鼓炮碌	一一
曰伊文字	一一
△文藏	一一
四武悪	一一
五富士松	一一

因花子	三九
田長光	四〇
囚腹立てず	四一
囚脛薑	四二
田縕し繩	四三
解説	卷一
田二大夫詩	一
囚脛赤の	二
囚も成妻歌	三
古文田彌	四
囚駒	五
囚妻の	六
囚妻の夫	七
囚妻の夫	八
囚妻の夫	九
囚妻の夫	十

（著者「解説」）天正本（黒暦）  
（著者「解説」）天正本（白暦）

### （著者「解説」）

## 狂言記 卷一



## ◎各流。天正本「青海苔」。

## 六 薩摩守

一 虎明本・天理本ともにまず出家が名乗る。茶屋が初めに登場する点では天正本に同じ。二 名乗りの言葉。見所への配慮からこうした固い言い方をする。三 虎明本「北国かたのもの」。天理本「東國方の者」。四 僧侶が自身をへりくだつて言う言葉。五 「大坂」は「おおざか」と濁る。天王寺は、大阪にある天台宗の寺、六 僧侶に対する尊称。「ゴバウ坊主、すなわち宗教家。尊敬した言い方」(日。ボ)七 召し上がるいか。「飲む」の意の尊敬語。八 「くれよう」となる前の形。「クリヨ」と読む。九 「言ひやる」の転。「言う」の尊敬語。十 「食べよう」となる前の形。「タビヨー」と読む。「食ぶ」は広く飲食することをさす。一一 「なにほど」の転。「なんぼう」の略。どれほど。

▲茶屋罷出たるは、辺りの茶屋で御ざる。行き来る人に、今日も茶を、売らふと存ずる。さてもく、今日は寂しい事かな。人通りも御ざらぬよ。▲僧罷出たるは、関東辺の、愚僧で御ざる。さやうに御ざれば、諸国執行を致し、又これよりも、大坂天王寺へ、参らふと存ずる。まづそろく参らふ。▲茶やのふ申御坊、お茶参らぬか。▲僧これはさて、知らぬ人の、茶を呉りやうと言やる。立ち寄つて、食びやうと存ずる。拵も道を歩けば、あのやうなる、慈悲深ひ人も、御ざるほどに、はあ、唯今は、お茶飲めとおつしやる。一つ食べませう。▲茶やはあ、なんぼなりとも、まいりませう。▲僧さてもく、これは良い茶で御ざるの。▲茶やいや身